



法人職員宅が火事で全焼した。原因は、おばあさんがストーブの灯油を入れ損なつて引火したこと。いにも高齢者デイで送迎中の法人他施設職員が偶々通りかかり発見、一九番通報とともに消火に尽力していたおばあちゃんを引き止め、人の被害を免れた。火災元と第一発見者が職員といふことは免れられない。幸運もそのことなら、地域に根差す福祉事業所でセーフティネットとして大切に実感した。二十三年度版高齢社会白書によると、高齢者は家事故が多く、その原因の多くは「場所で」「居室」「階台所」行動で「歩いていた」調理やそれ以外の家となっている。そんな状況からも高齢者は「〇〇〇」とあげる対象、いわゆる福祉サービス受給者としてイメージが強い。実際の要介護等認定状況は、65歳から74歳までで4・8%、20人に一人と意外と少なくなっている。75歳以上では急速に増加するが、それでも29・8%である。▼重慶十月に満百歳を迎えた聖路加国際病院院長日野厚明博士は、「現在でもターミナル化を受け現役だ。その豊富な臨床体験から、若い力を生きるうえで何か新しくすることははじめて」と、いってはじめることが非常に効果的だとしている。でも子どもたちのために全国行脚して行く「いのくに授業」その体力維持のために始めた「百歳からの館」、見事の一言である。高齢者や障害者が社会的を超えて地域の支え手になる、その潜在能力は明るい。もしそれが難しいとすれば、「人が生きる」はどういうことかを理解せず、表面的に支援したくなつてはいる福祉関係者の責任になるかもしれない。

觀天望氣

